

大形前方後円墳の築造企画（1） —栃木県国分寺町山王塚古墳の復元をめぐって—

小森紀男・齋藤恒夫**

- 1.はじめに (1)研究史 (2)地理的・歴史的環境
- 2.古墳調査の成果 (1)墳丘調査の成果 (2)主体部調査の成果
- 3.山王塚古墳の築造企画の検討
(1)墳丘の築造企画と尺度 (2)横穴式石室の築造企画と尺度
- 4.まとめにかえて

1.はじめに

(1)研究史

山王塚古墳は、国分寺町大字国分甲字阿彌陀1404-3番地に所在する大型の前方後円墳である。本古墳は、『国分寺村の史料』(1939年)・『栃木縣史』(1939年)・『紀元二千六百年記念古墳調査』(1940年)などで早くから取り上げられ、注目を集めてきた。地元在住の郷土史家・近藤亀吉氏の著した『国分寺村の史料』には次の様に記され、本古墳の墳形・埋葬施設・調査年等を窺い知ることができる。

前方後円墳の部 山王塚

「同字阿彌陀1404の3川林1反3畝1歩とあるも、現在は全部開墾せられたるも盛土の大部はその儘なるを以て研究資料としては好都合なり。明治26年11月発掘の際には丸石と粘土にて三方を囲み、天井と扉とは方5尺余の凝灰岩を用いたる石槨なりしも、石材は全部他へ持ち去られ、発掘品も武器玉類等その一片をも留めざるは遺憾なり。」

しかし、明治26年11月の発掘（盗掘？）以降も墳丘の削平は進み、現在では前方部の封土の殆どが崩され、後円部の墳頂にも及んでいる状況である。こういった後世の改変にも起因し、『栃木県の考古学』(1972年)、さらに『栃木県史』資料編考古(1979年)では、「当國の前方後方墳中では、最も新しいものではないかと推測される。」と言うように、前方後方墳の可能性が指摘されるまでになってしまった。

山王塚古墳を前方後方墳とするみかたに対し逸早く疑問を投げかけたのは、塙静夫氏であり岩崎卓也氏も『小山市史』通史編I(1984年)において次の様に述べ、大型古墳の変遷の中で本古墳の占める歴史的位置を初めて明らかにした。

「国分寺町の花見ヶ岡古墳（帆立貝式）に始まり山王塚・愛宕神社両古墳と続く古墳群は、

いまひとつ丸塚古墳を加えて、一系列の首長墓と想定できる。山王塚古墳を前方後方墳と考えるむきもあるが、塙静夫氏も指摘されるように、前方後円墳とみる方がよい（塙静夫『下野国の古代文化』1981年）。墳丘は変形しているが、本来は全長30mを上まわり、幅12~14mの基壇上に築かれている。6世紀後半期の築造と考えておきたい。』

さらに最近では、秋元陽光・大橋泰夫尚氏によって、思川・田川水系を中心とする古墳時代後期の首長墓の動向が再検討され、国分寺地域の大型古墳は、摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳・吾妻古墳→甲塚古墳・国分寺愛宕塚古墳→山王塚古墳→丸塚古墳の順に築造されたとする考えが出された。本稿は、単位地域を抽出し、単位地域ごとの各首長墓の系譜関係を基礎に据えたものであるが、特に主体部については、切石使用横穴式石室の導入時期を、既に塙輪を作り6世紀後葉からあることを明らかにし、從米の「切石」=7世紀の定説を見事に覆した。国分寺地域の首長墓の系譜が一系であるか否かはともかくも、これら大型古墳の築造順序に大きな変更の迫られることはないとと思われる。とするなら、山王塚古墳は墳形が円墳（丸塚古墳）に転換する直前の、最後の大型前方後円墳と言うことができる。

(2)地理的・歴史的環境（第1図）

山王塚古墳は、国分寺町大字国分甲にある。現況は雜木林になっており、四方を陣田・畠・宅地・養豚場等によって囲まれている。

本古墳は、思川・黒川と姿川によって抉まれた低位の洪積台地上（下野國分寺所在）に立地している。東方約2kmには姿川が南流し、西方約1kmには思川の形成する沖積低地（下野國府跡所在）を望むことができる。この洪積台地はそれぞれの河川に沿って南北に細長く形成され、また、所々に小河川の侵食を受けた起伏の多い地形となっている。古墳周辺の標高は52.4mで、東側水田面（標高48.0m）との比高は4.4mほどである。

本古墳の所在する台地上には、東西1.5km、南北5kmに亘って大小多数の古墳が築造されている。大型古墳は前述の7基があり、摩利支天塚古墳（全長116mの前方後円墳）→琵琶塚古墳（全長123mの前方後円墳）→吾妻古墳（全長115mの前方後円墳）→甲塚古墳（全長85mの帆立貝形の前方後円墳）→国分寺愛宕塚古墳（全長79mの前方後円墳）→山王塚古墳（全長90mの前方後円墳）→丸塚古墳（直径74mの円墳）が順次、縦統的に築造されていったと考えられる。一方、小規模な古墳も群を成して存在し、所謂「古墳群」を形成している。思川左岸に分布するこれら群集墳は、有力首長墓の築造を契機として出現したと言われる。具体的には、約50基からなる飯塚古墳群の形成は吾妻古墳の築造を契機にして、また約50基からなる藤井古墳群の形成は吾妻古墳の築造を契機にして、それぞれ開始されたと考えられている。さらに両古墳群の中間地域にも、「花見ヶ岡」・「国分」古墳群とも称すべき小型古墳の群れが存在して



第1図 山王塚古墳周辺の古墳分布図

おり、その分布状況からも、当然のことながら、国分寺愛宕塚古墳・丸塚古墳との密接な関連が想定される。

このように、山王塚古墳の載る台地は、古墳時代後期～終末期の大型古墳が継続的に造営され、合わせて、いくつかの群集墳が集中して認められる地域である。そして統く律令期には、下野国分寺が置かれ、古代下野国の主柱として発展した地域である。

本小考は、このような歴史的環境のもとに形成され、古くからの研究史をもつ山王塚古墳の、近年における発掘調査の成果を報告し、それに基づく横穴式石室の復元を試み、最後に本古墳の埴丘・横穴式石室の築造企画を検討してみようとするものである。

2. 古墳調査の成果

(1) 墓丘調査の成果（第2図・第3図）

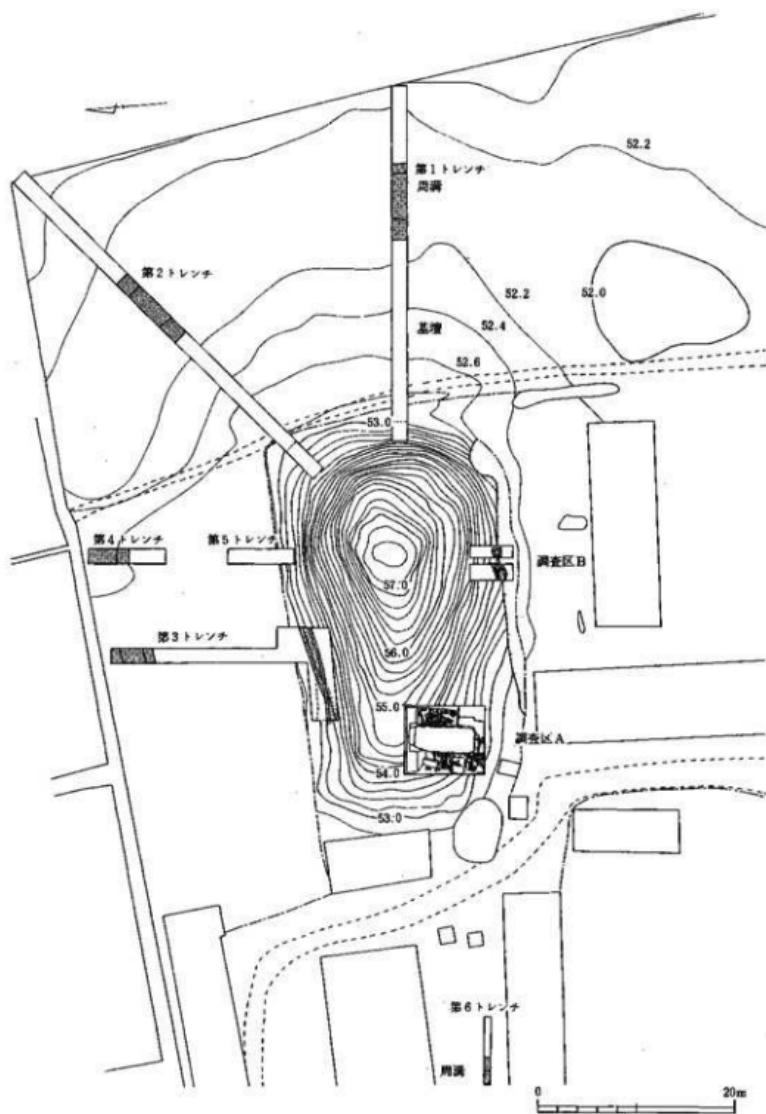
山王塚古墳は、西面して構築されており、現存する墳丘全長は、約41mである。しかし、「紀元二千六百年記念古墳調査」には長径170尺（約51.5m）、『栃木県の考古学』には全長52mと記されており、また、古老の話では、前方部も後丘部と同じだけの高さが存在していたと言われる。従って、現在の前方部は、その前縁が少なくとも10m以上後退し、封土の大半は失われていると見ることができる。

後丘部は前方部に比して比較的残りが良く、標高53.6mのコンターラインまではほぼ方形を呈するが、これより高いコンターラインでは円に近いカーブを描くようになる。従って、墳頂部はかなり削平されているものの、後丘部墳頂周辺は、現状を大きく損ねるものではないと思われる。墳頂平坦面の標高57.5m。東側畠地（標高52.5m）との比高は約5mである。

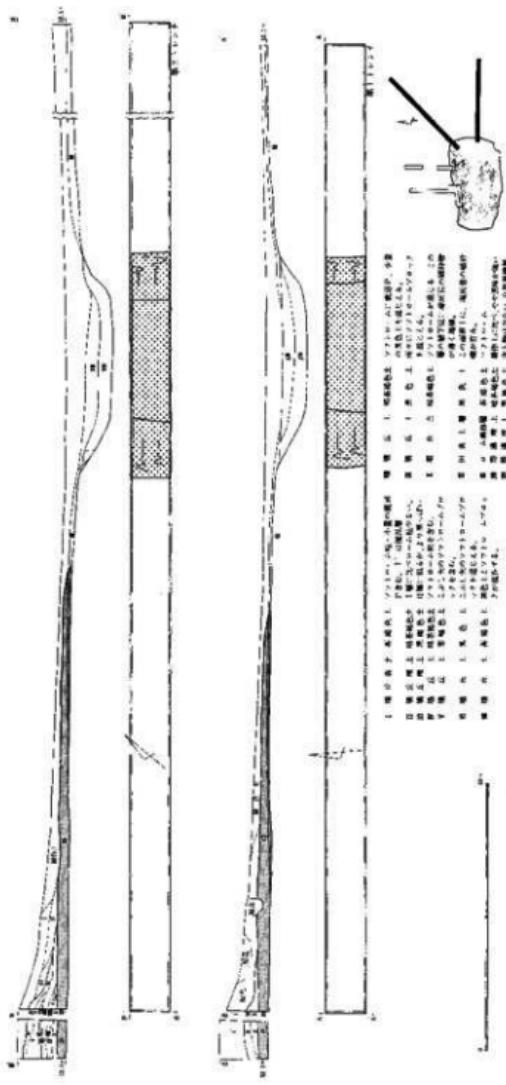
墳丘周辺の旧状は、東側畠地によく残されている。畠地南側で、標高52.0mの最も低いセンターが一箇所あるが、周溝の痕跡を留める標高52.2mのセンターは、2本が約15mの幅をもって、後丘部の外周をU字形に取り巻いている。現存する墳丘裾部標高53.0mのセンターから周溝の内縁を推測させる標高52.2mのセンターまでは、幅が14m～16mほど有在し、この間において約0.8mの高低差が認められている。先学者が「基壇」として認識した幅広の平坦面が、僅かながら遺存している部分である。

墳形確認の周溝調査は、墳丘とともに地形の旧状を比較的よく留めた、後丘部東側と北側に5本のトレンチを設定し、さらに、墳丘規模を出すために、建物の間を縫って第6トレンチを設定し掘り進めた。以下、第1トレンチと第2トレンチを中心に確認された遺構及び調査所見を記述することにする。

第1トレンチは、後門部東側に設定した幅1.5m×長さ36.4mの試掘溝である。基壇部と周溝部のはか、墳丘上段部下半の盛上の状況をも調べた。I層は擾乱層。II層とX層は僅かに



第2図 山王塚古墳墳丘測量図及びトレンチ配置図



第3図 第1トレンチ・第2トレンチ火消図

遺存した墳丘盛土層。X層が黒色を呈する旧表上で、現存する墳丘の外周にまで及んでいる。このX層直上面には凝灰岩の細片が厚さ3cm～4cmに堆積しており、この面の標高は52.4m。周溝の落ち込みは、現存する墳裾から18.8m程外側で確認された。周溝は、耕作土（地表）面から1.5mほど掘り込んではほぼ平坦な溝底とし（標高50.5m）、両側になだらかに立ち上がっていいる。周溝幅は上端で8m、下端（底面）で4.8mである。現存する墳丘と周溝との間の部分が、「基壇」と呼ばれる、幅広の比較的平坦な面を構成する部分である。この部分の墳丘盛土を確認することはできないが、周溝外周の層位と比較してみた場合、①基壇部分にのみ旧表土の層（X層）が残されていること、②基壇部分の方が20cm～40cm僅かに高いことなどから、元来は、多少の盛土が行わっていたと推測することができる。本古墳を二段築成の古墳とみた場合、現存する墳丘は墳丘構築第二段目に、その外周の周溝までの所謂「基壇」と呼ばれる部分は、墳丘構築第一段目に相当することになる。

第2トレンチは、第1トレンチの北側、墳丘主軸に斜め方向に設定した幅1.5m×長さ46.4mの試掘溝である。墳丘の盛土状況が良く残されており、I層が表土、II層・III層が埋土、IV層～X層の7層が墳丘盛土である。墳丘盛土の断面では4種類ほどの土（VI層とV層がソフトロームブロックを混じえた黒色土。V層とVI層がソフトロームブロックと黒色土が混在する茶褐色土。VII層がロームブロック・鹿沼バミスの明茶褐色土。VIII層とIX層が黒色土にソフトロームが混じる暗茶褐色土。）を交互に敷きつめて叩き締める版築ともいわれる技法がよく観察できる。この下層は旧表土の黒色土層（X層）であるが、この直上面には、第1トレンチと同じく凝灰岩の破碎繙が薄く（厚さ2cm～8cm）堆積している状況（標高52.4m）が観察され、この凝灰岩の破碎繙は第5トレンチの旧表土直上面（標高52.4m）からも確認され、墳丘下に広範な広がりをみせていることが判明した。この凝灰岩は、横穴式石室の石材に使用されたものの加工層と考えるのが妥当で、従って、石材の最終加工作業がこの古墳の構築予定地で行われ、盛土を行う前に人為的に敷かれたものと理解することができる。旧表土直上面における凝灰岩加工層の広範な広がりは、墳丘を盛り始めるまでの、①選地 ②整地 ③埋葬施設（横穴式石室）の構築といった、一連の作業行程の一端を示しているとみるとることができる。周溝の落ち込みは、現存する墳裾から16.2mほど外側で確認された。覆土は、第1トレンチと同じく耕作土の下に2層（埋土・覆土）が確認できる。周溝の深さは、耕作土（地表）面から溝底まで1.7mほどで（標高50.3m）、ほぼ平坦な溝底からなだらかに立ち上がっている。その幅は上端で8.4m、下端（底面）で4.5mである。

以上、墳丘調査によって明らかとなつたいくつかの点を箇条書きにまとめると、次のようになる。

1. 本古墳は、西面して築造された全長約90m（周溝底面の墳丘側から計測）の前方後円墳

である。本古墳は、二段築成の古墳とみられ、墳丘構築第一段目に幅広い平坦面（基壇）を形成している。測量図に示した現在の墳丘は、基壇部分は全て削平され、僅かに墳丘構築第二段目の後円部及び前方部の一部だけが残存しているのみである。

2. 周溝は、現存する墳丘の墳頂から16.2m（第2トレンチ）～18.8m（第1トレンチ）ほど外側でその落ち込みが確認された。周溝の幅は上端で8.0m～8.4m、下端（底面）で4.5m～4.8mである。
3. 周溝底面の標高は50.3m。現存する後円部墳頂平坦面の標高は57.5mであるので、その比高は7.2mになる。
4. 石室の石材と考えられる凝灰岩の細片が、旧表土の直上面から出土している。この面の標高は52.4mと全てのトレンチで一致しており、恐らく墳丘を盛る前に当時の整地面上に散かれていたものと考えられる。石室を中心広い範囲で認められることから、意図的に整然と敷いたものとみることができる。

(2) 主体部調査の成果（第4図～第7図）

墳形確認調査に引き続いて、埋葬施設の構築位置とその構造・遺存状況を明らかにすることに目的を置き、上体部の調査を実施した。

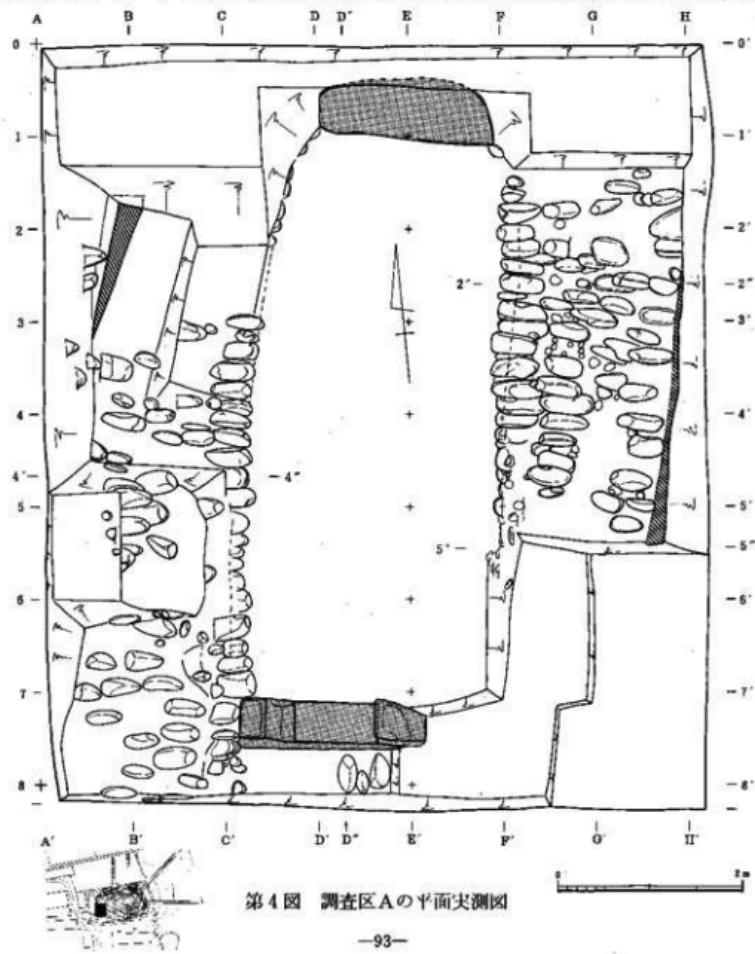
調査は、横穴式石室の埋葬施設が構築されていると考えられる、前方部のくびれ部寄り南側（調査区A）と後円部南側（調査区B）の2か所にトレンチを設定して掘り進めた。

調査区Aは、土地の人々の話からも、最も埋葬施設の位置する可能性の高い所であり、ここに調査の主力を置き、合わせて調査区Bにも置かれている可能性を考慮して、同時に進行の形で作業を進めた。その結果、調査区Aで南面して開口する横穴式石室が確認され、調査区Bでは、墳丘の盛土が層を成して認められるのみで、埋葬施設やそれに伴うと考えられる遺構は認められなかった。従って、本古墳の埋葬施設は、前方部のくびれ部寄り南側に1か所だけ構築されていたと結論づけることができる。以下、調査区Aで確認された遺構（第4図～第6図）及び調査所見を記述し、横穴式石室の復元案を示したい。

第4図は、調査区Aの平面実測図である。調査区の大部分に盗掘時の擾乱が及んでいたので、調査は、墳丘盛土等の遺存部分は極力残すようにし、擾乱土層の除去作業を進めて行くこととした。そのことによって、盗掘・削平の状況が分かり、遺存部分を精査することによって墳丘・埋葬施設の構築状況が理解できると考えたからである。A-A'ラインは墳丘主軸に直交、1-1'ラインは墳丘主軸に平行させて設定したものである。

調査区北辺からは凝灰岩の大型切石（奥壁）が、南辺からも凝灰岩の中火を例り抜いた切石（例り抜き玄門）が確認された。玄室長になる両者の距離は、内内壁間で6.1mである。奥壁は

最大幅1.9m・厚さ0.7m（推定）、玄門は最大幅2.05m・厚さ0.44m。奥壁と玄門の切石は墳丘主軸にはほぼ平行するように据えられているものの（厳密には、奥壁内側は墳丘主軸に対し8度ほど右回転している）、両者の中心は石室主軸（E-E'ライン）に対し大きなズレをみせている（玄門の中心が奥壁の西端コーナー附近にあたっている）。恐らく何らかの理由によって石室の正面観を重視しながら、石室主軸を故意にずらして玄門を設置したことが考えられ、このことは、「掘り方」の南北ラインが、奥壁と玄門のそれぞれ中央を結んだラインにはほぼ平行し、石室主軸（E-E'ライン）には平行して据られていないことからも推察することができる。



第4図 調査区Aの平面実測図

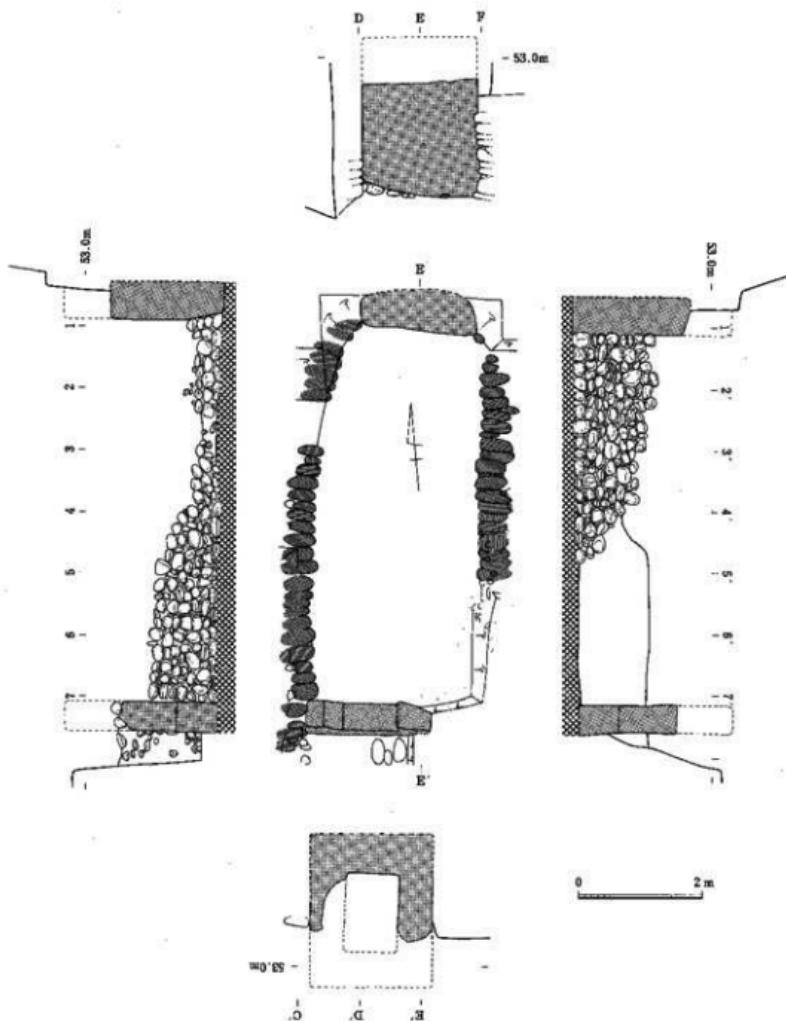
細かな検討は次章で行いたい。

石室は、東西両側壁が川原石の小口積み。東側壁は奥壁から16列、距離にして3.7mほど遺存していた。しかし、その先は攪乱が激しく、川原石列の除去は根石にまで及んでいた。川原石は長さ40cm～50cm、厚さ10cm～30cmほどの扁平な形状で、石室主軸にはほぼ直交して並べられている。東側壁の遺存した部分には、側壁の裏側に3列に及ぶ川原石の控え積みが認められ、その幅は1.5m。従って、側壁を加えると、4列・幅約2mにわたる川原石列が構築されていたことになる。西側壁も同様に、側壁の裏側に3列に及ぶ川原石の控え積み列が認められた。調査区Aの東西両壁際からは旧表土の黒色土（第3図のⅧ層に相当）が確認され、両者の距離は約6m。従って、幅約6mの「掘り方」の中に石室が構築されていたことになる。

第5図は、石室実測図である。石室は南に開口しており、その主軸（E-E'ライン）は磁北から5度東によっている。玄室の規模は、長さ6.1m、最大幅2.8m。高さは奥壁が1.9mまで、東側壁が7～8段の川原石積み（高さ約1.2m）まで遺存していたが、例り抜き玄門の形状などから復元すると、実際の大井までの高さは2.6m前後に及んでいたと推測される。東側壁は、根石が16列まで遺存し、残りのよい所で8段積まれていたが、6段目ごろまで横に川原石の目を通した驚然とした構築状況が窺われている。この積み方は、所々に大型の川原石（厚さ25cm～30cm）が嵌められているが、下段に大型品を用いるといったことは特に意識されていない。西側壁も同様な積み方を行っている。川原石間は良質の白色粘土で丁張りが施され、小石を詰じて隙間を充填していた。両側壁間の根石は、西壁が剥張り（奥壁から外側に弧状にふくらみ、玄門に至って奥壁とはほぼ同じ幅にすぼまる）を呈するものの、東壁は奥壁側が直線的に配列され、現存する東壁が玄門に接するまでには急なカーブを描かなければならないことになり必ずしも左右対称とはなっていない。

玄室の床面は地山（ローム面）をそのまま床にしているもので、川原石などが敷かれていた痕跡もなく、排水溝などの諸施設も認められなかった。玄室の床面積は約14m²。羨道部の大部分は調査区外になったため、その内容は不明だが、玄門の前面に僅かに羨道部の側壁と思われる川原石列を確認できた。

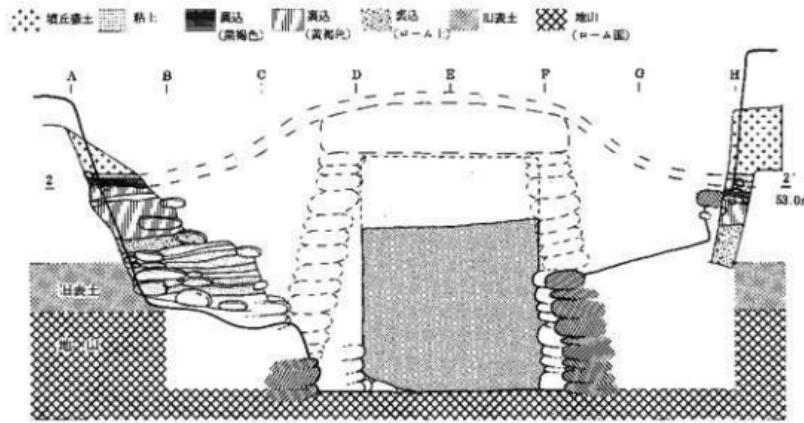
第6図は、調査区Aの石室断面図である。上段は、2-2'ライン（奥壁から1mほど南）の断面図である。東側壁は扁平な川原石を、現状で9段（高さ約1.3m）ほど小口積みにして壁面をつくっている。側壁は持ち送りがやや急であり、9段目で床面から20cmほど内側に突き出している。天井石までにはさらに8～10段の石が積まれていたと推測され、同様な持ち送りのカーブを描くとすれば、さらに内側に20cmほど突き出る計算になる。西側壁は、奥壁に近づくに従って盃擲の被覆が大きくなり、僅かに3段の川原石積みが残されているのみであった。旧表土の黒色土層は、西側壁の小口面より1.6mほど奥から認められ、この上面の標高は52.2m。



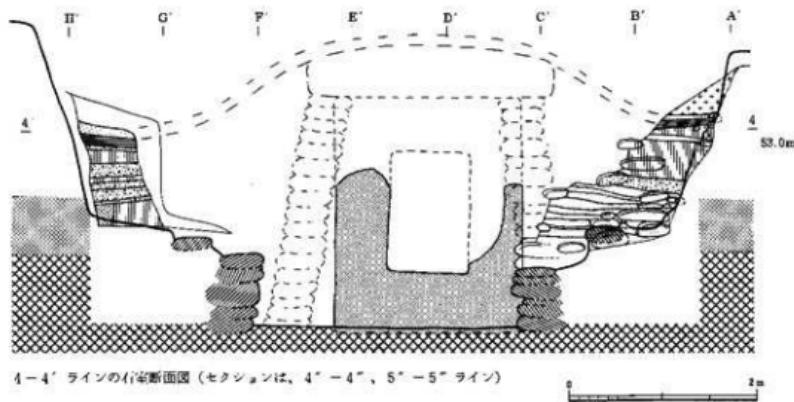
第5図 石室実測図

西壁側のセクションから、填丘盛土層、石室を被覆した黄白色土層（良質の粘土を多量に含む）の下に、石室の裏込十層が版築状に積まれている状況が分かる。

第6図下段は、4-4' ライン（奥壁から3mほど南）の断面図である。東側壁は5段の石積みと控え積みが、西側壁は4段の石積みと控え積みが残されているのみであった。東側壁の小口面より1.8mほど奥から旧表上の黒色土が現れ、この上面の標高は52.3m。東壁側のセクションから、石室を被覆した黄白色粘土層と黒色の旧表土層との間には、石室の裏込土層が版築状を呈し、黄褐色土と黄白色土とが交互に層を成して積まれていた状況がよく分かる。東西



2-2' ラインの石室断面図（セクションは、2'-2''、4'-4'' ライン）



第6図 石室断面図

両側壁際で確認できた
石室被覆土層（厚さ10
cm～20cm）の標高は5
3.0m。天井石上面の
標高は54m前後と推定
されるので、かなり急
な曲線を描いて石室全
体を覆っていたことに
なる。この図では玄門
を投影してあるが、石
室主軸（E-E'ライン）
よりかなり西側に
寄って据えられていることが分かる。

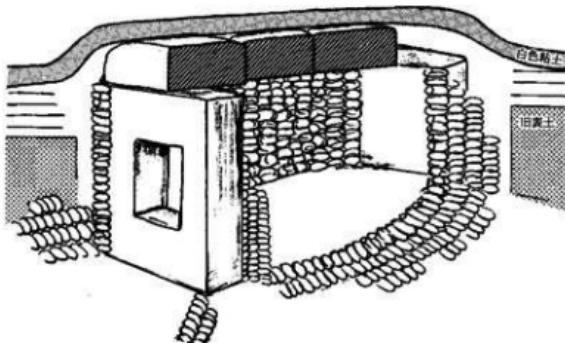
かなり破壊を受けた石室であるが、復元するなら、第7図になると推定される。天井石は、
他所へ運ばれ橋として再利用されていたものが遺存しているが、その枚数は3枚前後になると
考えられる。床面の標高は50.8m、旧表土面の標高は52.2m、天井石上面の標高は54m（推
定）。従って、石室全体の約2/3が旧地表面下に構築された、半地下式の横穴式石室と言うことが
できる。

以上、主体部調査によって明らかとなつたいくつかの点を箇条書きにまとめると、次のよう
になる。

1. 本古墳の埋葬施設は、前方部のくびれ部寄り南側に南面して構築された横穴式石室で、
玄門が凝灰岩一枚石の割り抜き、側壁が川原石の小口積み、奥壁に鏡石として凝灰岩の一
枚石が使用されていた。天井石は全て取り去られていた。側壁の積み重ねは三重にわたつ
て側壁と同様の長さの河原石を密に積み上げており、巨大かつ堅固な造りであったことが
窺われる。石室の規模は、長さ6.1m、最大幅2.8m、高さ2.6m（推定）。

後円部南側のトレンチでは、墳丘の盛土が層を成して認められるのみで、埋葬施設やそ
れに伴うと考えられる遺構は認められなかった。従って、本古墳の埋葬施設は、前方部の
くびれ部寄り南側に1か所だけ構築されていたと結論づけることができる。

2. 石室を構築した「掘り方」は、東西幅約6mほどで、石室の位置を旧表土から長方形状
に深さ1.4mほど掘り込んで床面にしている。ローム面に直に奥壁と玄門を据えており、
床面には川原石などを敷いた痕跡は認められなかった。



第7図 横穴式石室の推定復元図

3. 山王塚古墳の築造企画の検討

(1) 墓丘の築造企画と尺度

前方後円墳の築造企画についてはすでに多くの論考がある。ここでは後円部径の8等分値を前方後円墳築造の基準単位として、前方部前端線が何単位にくるかで分類し、基準尺度に尋（大尋160～160数cm・小尋150～150数cm）を想定している石部正志氏・宮川徳氏らの築造企画論を基本にして、山王塚古墳の築造企画を検討していきたい。

山王塚古墳の前方部の盛土はかなり崩され、その前縁はほとんど消失しており、前方部はその痕跡をとどめるのみである。削平は後円部の現状での見かけの墳裾にまでおよんでいる。トレンチ調査による外形確認が後円部東側から北側一帯、および前方部前端において行われた結果、現在は全くその形跡が失われてしまった墳丘の概要を捉え、後円部径や墳丘長などの基礎的なデータを得ることができた。しかし、くびれ部幅や前方部幅、墳丘第二段の形態などを把握するまでは至っていない。この為、築造企画を復元するのに十分なデータが揃っているとは言い難く、現時点では本古墳の原形を正確に復元することはできない。そこで、山王塚古墳の南西330mに隣接する国分寺愛宕塚古墳を参考にしながら、山王塚古墳の築造企画の復元を試みたい。なぜなら、両古墳には墳丘築造上の共通性が窺われるからである。

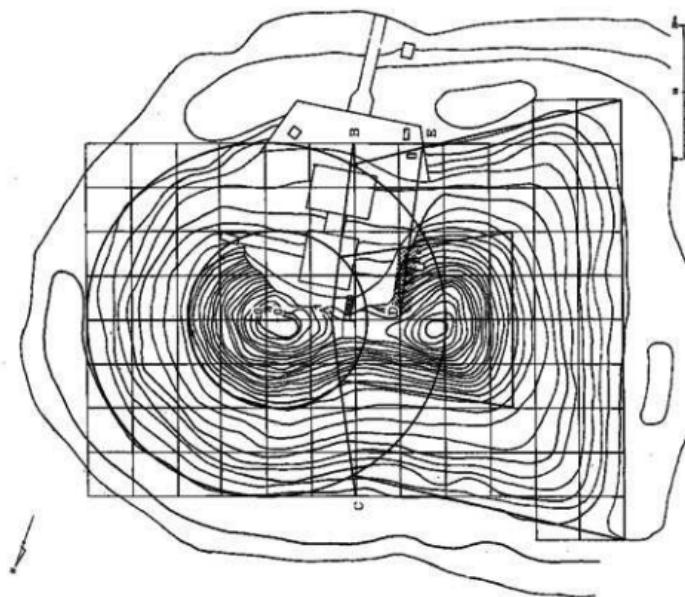
愛宕塚古墳は西面して築造された前方後円墳で、墳丘南側に愛宕神社が建てられ墳丘の一部が削られているものの、その他の遺存状況は良い。山王塚古墳とほぼ同規模で、墳丘第1段に幅広の平坦面（基壇）を有する。主体部は後円部ではなく、前方部のくびれ部寄りにあり、凝灰岩製の天井石の一部が露出している。また出土した須恵器（脚付壺・厄-TK43型式併行）などから山王塚古墳に若干先行する時期の築造と考えられる。このように、愛宕塚古墳の墳丘および石室の位置に山王塚古墳との共通性がみられること、築造地点・築造時期が近接しており、同一系譜の首長墓であると考えられることなどから、山王塚古墳と同様の築造企画を採用している可能性が高い。

①愛宕塚古墳の築造企画の検討

まず、愛宕塚古墳の築造企画について検討してみたい。愛宕塚古墳は、図8に示したように、4区型、1区4尋、1尋164cm（大尋）、1区 6.56m、後円部径52.5m、墳丘全長78.7mの築造企画に復元できる。

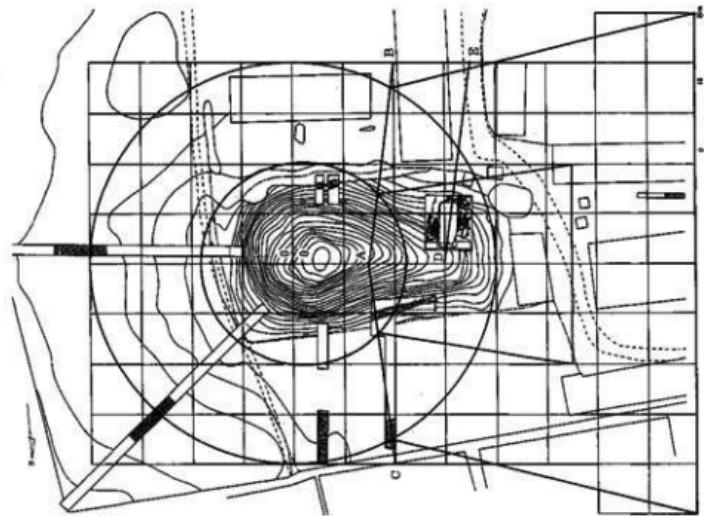
後円部・前方部ともに幅広の第1段平坦面（基壇）がめぐり、墳丘は2段築成になっているが、墳丘第1段は墳端からなだらかな斜面になっているため、第1段平坦面端は判然としない。

後円部第1段墳丘の中心点0は、墳頂平坦面の中心から若干ずれている。これは後円部墳丘第1段と第2段が同心円ではないためで、中心点0の移動がみられる。墳丘第2段は0'点を中心としており、0点から1尋前方へ移動している。



第8図 愛宕塚古墳の築造企画推定復元図

4区割、1/44倍、1号150cm
ア:部分は縮尺表示の推定位置



第9図 山下塚古墳の築造企画推定復元図

4区割、1区5号、1号150cm

前方部前端線は10区で、右5区、左5区に振り分け、左右対称である。

くびれ部折線A-B・A-Cは中心点0から1½区前方のA点からはじまり、終点B・CはA点から前方（前方部方向）に½区の距離をとる。くびれ部折線は交点Aを前方部側に出せば出すだけくびれ部がよくしまる。また、くびれ部折線の終点B・Cが交点Aから前方に前進すればするだけ、つまりくびれ部折線がつくる角度が鋭角になるほどくびれ部はよくしまり、幅は狭くなる。このくびれ部折線と平坦面との関連は強く、角度をしめると前方部での平坦面の幅が狭くなってしまう。よって、幅を広く取るために、角度を大きくとる必要がある。愛宕塚古墳の場合、交点から終点までの距離を½区という非常に短い距離に企画したのは、くびれ部折線の角度を大きくとることが、幅広の平坦面を設定するための必要条件であったためと言える。

墳丘上部の等高線の密になった部分を墳丘第2段と考えると、後円部墳丘第2段径は墳丘第1段径の½=4区に企画したものと考えられる。前方部墳丘第2段は前方部幅を4区にとり、後円部径と一致する。また前方部第2段端は前方部前端線から2½区後退して位置すると思われる。

②山王塚古墳の築造企画の検討

それでは、以上検討してきた愛宕塚古墳の築造企画を参考に、山王塚古墳について検討してみたい。

山王塚古墳は発掘調査の成果から後円部径を60.0mに復元できる。山王塚古墳と愛宕塚古墳の後円部の大小を捨象して一致させ（山王塚古墳後円部直径×½=愛宕塚古墳後円部直径）、愛宕塚古墳の築造企画を山王塚古墳に当てはめると図9のようになる。墳丘主軸の向きは後円部から前方部へ続く尾根状の部分によった。

このとき前方部の長さがまず問題となるが、調査区Bのトレンチが前方部前端の状況を理解する唯一のトレンチである。このトレンチでは周溝側から墳丘側へなだらかに立ち上がりおり、比較的急斜面で立ち上がる後円部の周溝形態とは異なる状況を示している。このなだらかに立ち上がる形態は、後円部の墳丘第1段斜面から第1段平坦面に移行する部分に似通っている。また、後円部での周溝底の標高は50.2m～50.6mを測るが、このトレンチの西端は標高が51.67mであることから、後円部側と比べ約1.1m～1.5mも高く位置することになる。よって周溝底はさらに深く位置することが推定される。この2点から考えて、前方部前端はこのトレンチ西端のさらに西側に位置すると考えて無理ない。推定復元図ではトレンチ西端と前方部前端線とは1.5mのずれが生じるが、以上のことから復元図と墳頂とはほぼ一致するものと考えて大過ないと思われる。

この結果、山王塚古墳は図9に示したように、4区型、1区5尋、1尋150cm（小尋）、1区

7.5m、後円部径60.0m、墳丘全長90.0mの築造企画に復元できる。

前方部の形態は前端線の位置以外は全く不明であるが、愛宕塚古墳と同一の形態をとるものとして一応の復元をした。

次に墳丘第2段についてであるが、後円部、前方部ともにかなり崩されているため、形態の把握は難しい。ここでは愛宕塚古墳と同一の形態をとるものとして一応の復元をしたが、後円部については墳頂平坦面が墳丘第1段の中心点0より前方に位置することから、愛宕塚古墳と同様、後円部第2段の中心点0'は0から前方へ移動していると考えられる。ここではその距離を愛宕塚古墳と同じく1尋として復元した。

次に石室の位置について見てみたい。中心点0より3区前に位置するD点から南側くびれ部折線A-Bと平行に引いた線D-Eが横穴式石室構築の基準線であると考えられる。横穴式石室の築造企画は後述するが、石室の位置も墳丘全体のプランの中に位置づけられている。これを愛宕塚古墳に当てはめると、現在石室の天井石が一部露出している位置とはほぼ一致する。墳丘がともに4区型であるほかに、この石室の位置関係からも山王塚古墳と愛宕塚古墳が同一の築造企画に基づいて築造されている可能性が指摘できる。

最後に立面の築造企画についてであるが、後円部周溝底と後円部墳頂との比高は7.2mを測る。これは1区=7.5mに近似することから、墳丘高を1区に企画して築造された可能性が高い。

以上、愛宕塚古墳、山王塚古墳の築造企画の推定復元を行ったが、この結果、同規模であると思われていた両古墳は、全長において11.3mの差があり、山王塚古墳の方が大きいことが明らかとなった。この差は、基準尺度として山王塚古墳は小尋(150cm)、愛宕塚古墳は大尋(164cm)を用い、山王塚古墳の方々が小さい尺度を採用しているものの、1区を構成する尋数を山王塚古墳は5尋、愛宕塚古墳は4尋と、山王塚古墳の方が1尋大きく企画しているためである。さらに、両古墳はともに4区型であり、石室の位置も一致するなど、同一の築造企画にもとづいて築造されている可能性を指摘できた。

(2) 横穴式石室の築造企画と尺度

横穴式石室の企画については墳丘の築造企画の項でも述べたように、後円部の中心点0から前方部側へ3区前進したD点から、南側くびれ部折線A-Bと平行に引いた線D-Eを石室構築の基準線にしている可能性を指摘しておきたい(図9)。図10は石室の築造企画の細部を示したものであるが、奥壁と玄門の中心を結んだラインが線D-Eと一致する。つまり、奥壁と玄門の中心を結んだラインが石室構築の基準線である。

奥壁と玄門の距離は6.1mであり、これは4尋で企画されたものであると考えられる。この

とき1尋は小尋152cmとなり、墳丘築造に用いられたと考えられる小尋150cmとは若干の差が生じる。墳丘や石室などの企画性を論ずる場合、そこに施工時のズレや、長年の風雪による崩れ、後世の人为的な変更の可能性を考えねばならない。このためそれぞれの遺構から帰納的に考察する築造企画に若干のズレが生じてしまうのは仕方ない部分がある。企画論はそのズレの可能性を認めた上で、そのズレを補正し、できるかぎりの正確さ、客觀性を追究しようとするものである。木古墳の場合は、墳丘および石室の企画の基準尺度に2cmの差が生じているが、同じ小尋の範囲内(150~150尋cm)に収まるものであり、大きな問題にはならないと考える。むしろ両者の差が非常に小さい点に意義が見いだせると言えよう。つまり墳丘、石室の企画にはともに小尋という、同一の基準尺度が使用されていたと考えることができ、この点が重要である。

側壁の根石間の最大幅は2.8mで、これは2尋3.0mを基本とした企画とみられる。両側壁の根石は、西壁が胴張りを呈するものの、東壁は直線的に配列され、必ずしも左右対称になっていない。東壁の直線部分は石室構築の基準線D-Eと平行することから、このラインを基準にして構築された可能性も考えられる。西壁についても奥壁に近い北側部分で急なカーブを描いているが、南半分は比較的直線的に構築されており、西壁も東壁と同様のことが言えるかもしれない。

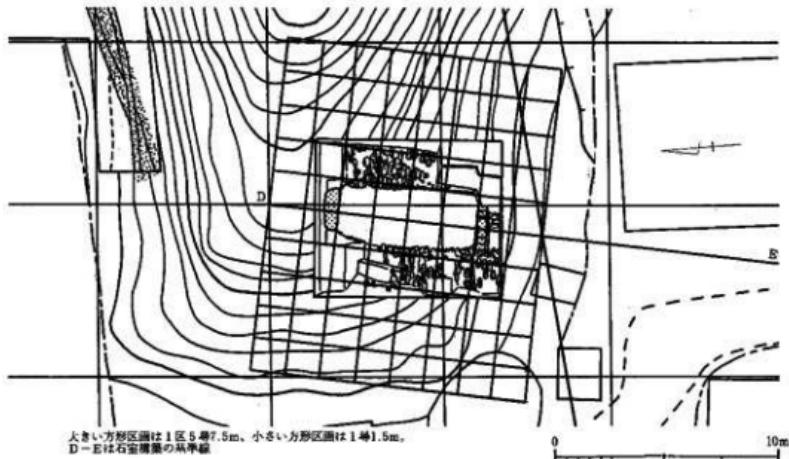
掘り方の南北ラインは石室構築の基準線D-Eとはほぼ平行することから、石室の基準線により掘り方が企画されていると考えられる。さらに、東西内壁で確認された旧表土間の距離は約6mであり、幅1尋で構成されているとみることができる。

よって木古墳の石室は玄室長、掘り方幅を4尋にとり、玄室幅を2尋、側壁の川原石積みおよび裏込め石の幅を、東西それぞれ1尋で企画したものであるとみることができる。

なお、玄門幅(2.0m)および奥壁幅(1.9m)については1.5尋(2.03m)、玄室推定高(2.6m)については1.5尋(2.53m)の可能性が考えられるが、1尋を3分割した値が築造企画に使用されているか否かは依然検討の余地がある。



第10図 横穴式石室の築造企画復元図
方形K寸は1尋152cm



第11図 横穴式石室の築造企画と墳丘の築造企画との関係図

次に石室の築造企画と墳丘の築造企画との関係を見てみたい。図11は石室と墳丘の位置関係を示したものである。

奥壁と玄門の中心を結んだ線が、前方部の中心点0から前方部側へ3尋前進した点Dから、南側くびれ部折線A-Bと平行に引いた線D-Eと一致し、これが石室構築の基準線であることは繰り返し述べたが、このうちD点は石室企画のキイボイントになっている。

D点から2尋(3.0m)の位置に奥壁壁面を設置し、6尋(9.0m)に玄門の玄室面を設置することにより玄室長を4尋に構成している。奥壁と玄門は平行せず、若干のズレをみせているが、これは奥壁が石室構築の基準線D-Eに直交させて設置しているのに対し、玄門が墳丘主軸と平行に設置しているためと考えられる。

羨道の大部分は調査区外になったため、その内容は不明であるが、前方部墳丘第2段の南側線と玄門との距離は約2.0mに復元できることから、短い羨道が付くと考えられる。玄門は墳丘主軸に平行して設置されていることから、羨道についても墳丘主軸に直交させている、つまり石室構築の基準線ではなく、墳丘の築造企画の基準線に基づいて構築されている可能性が高いのではないだろうか。羨道を石室の基準線D-Eに平行に構築した場合、前方部墳丘第2段の南側線との角度が約75度になり、石室の正面観はかなり不自然なものになると思われる。玄門についても同様のことが言える。よって石室の正面観を意識して、墳丘の築造企画の基準線に基づき、玄門・羨道を構築したと思われる。

以上、石室の築造企画について見てみた。本古墳は発掘調査時から石室主軸と墳丘主軸の関

係の把握が問題となっており、何らかの理由によって石室主軸を故意にずらして玄門を設置したことが想定されていたが、以上のように墳丘と石室の全体的な平面プランの検討を行った結果、それぞれの位置関係は単なるズレによるものではなく、1つの築造企画にもとづいて有機的に結びつきながら構築されていたことが明らかとなった。

4.まとめにかえて

山王塚古墳の発掘調査に汗を流し、また報告書作成に図面の墨を入れながら、常に頭にあったことは、なぜ埋葬施設が前方部のくびれ部よりに存在し、なぜ右室の平面プランが正んだ形状を取しているのかだった。そのような時、石部正志先生は、「これほどの大型古墳であるから、埋葬施設の位置も、その構造も、墳丘の、あるいは石室の全体的な平面プランの中で、必ず位置づけられているはずですよ」と言われ、それに関する種々の助言をして下さった。

解決の糸口は、石室の「掘り方」の南北ラインが、奥壁と玄門のそれぞれ中央を結んだラインに平行していることと、山王塚古墳と国分寺愛宕塚古墳の埋葬施設の位置が、全く同じ位置関係にあるらしいということの2点であった。この見通しの中で検討した結果、山王塚古墳と国分寺愛宕塚古墳とは、同一の築造企画にもとづいて築造されていること、山王塚古墳の石室の歪みも、1つの築造企画にもとづいて墳丘と石室の有機的な関連のもとで構築されていることが明らかとなった。従来、墳丘は墳丘、石室は石室というように別々に考えられ、検討を加えられがちであった。しかし、今回の細やかな調査によって、墳丘における石室の位置も、總体として、全体的な築造企画の中に位置づけられていることを示すことができた。

本小考では、山王塚古墳と国分寺愛宕塚古墳とが、きわめて密接な関係をもって営まれていたことが明らかとなった。思川・姿川流域を中心に分布する、下野型とよばれる大型古墳は、石室の位置・石材・構築法などが共通するほか、墳丘の規模にも相互の企画性が認められるという。今後はさらに、地域を広め、墳丘の築造企画とともに埋葬施設の比較検討を行い、その背景にあるものを問題にしていきたい。本小考がそのための一里塚となるよう努力したく、大方の御指導、御批判をいただけたら幸いである。

執筆にあたり御助言を賜った、石部正志・塙静夫・大金宣亮・橋本澄朗の諸氏、並びに普段から学習の機会を共にしている本県古墳学会・宇都宮大学考古学研究会の同僚諸兄に対し、記して感謝する次第である。また、大橋泰夫氏からは、貴重な図面類の提供をいただいた、記して感謝いたします。

(* こもりのりお 栃木県立しちつけ風土記の丘資料館)

(**さいとうつねお 宇都宮大学教育学部大学院生)

〈註〉

- (1) 近藤亀吉『下野国分寺村の史料』国分寺村教育後援会、1939年
 - (2) 田代善吉『栃木縣史』巻12考古編、1939年
 - (3) 栃木県下都賀郡教育会編『紀元二千六百年記念古墳調査』1940年
 - (4) 大和久廣平・塙静夫『栃木県の考古学』吉川弘文館、1972年
 - (5) 山越茂「山王塚古墳」『栃木県史』資料編・考古、1979年
- 同様に、前方後方墳の可能性を指摘した文献には、次のようなものがある。
- 鈴木勝「栃木県における前方後方墳について」『附和51年度高校社会科紀要』1977年
 - 山越茂「下野國前方後方墳私考」『栃木県史研究』14、1977年
 - (6) 塙静夫『下野國の古代文化』第一法規、1981年
 - (7) 岩崎卓也『小山市史』通史編！ 小山市史編さん委員会、1984年
 - (8) 秋元陽光・大橋泰夫「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向」『栃木県考古学会誌』第9集、1988年
 - (9) 進藤敏雄「栃木県の群集墳の一様相」『古代』第89号 早稲田大学考古学会、1990年
大橋泰夫「下野における古墳時代後期の動向」『古代』第89号 早稲田大学考古学会、1990年
- 上記論文は、飯塚古墳群中に、29号墳など6世紀中葉まで遡る古墳の在ることから、古墳群築造の契機を、6世紀前葉から中葉頃に位置付けられる大型前方後円墳の摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳の築造に求めた。さらに、1992年10月から行われた飯塚31号墳の調査でも、この古墳が6世紀前半に位置付けられる帆立貝式前方後円墳であることが判明し、從来の説が補強された。
- (10) 山王塚古墳の墳丘及び埋葬施設の遺存状況を確認する調査が、しもつけ風土記の丘資料館によって行われ（第1次調査〈昭和62年度〉、第2次調査〈昭和63年度〉、第3次調査〈平成元年度〉）その成果は『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第2号～第4号1988～1990年に掲載されている。
 - (11) 上田宏庵『前方後円墳』学生社 1969 横田国男『古墳の設計』築地書館1975 甘粕健『前方後円墳の研究—その形態と尺度について』『東洋文化研究所紀要』37 1965 梅沢重昭「毛野の古墳の系譜」『考古学ジャーナル』150 1978 堅田直「前方後円墳の墳丘について—築造の原則—」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社 1982など
 - (12) 石部正志・田中英夫・駒田啓一・宮川徳「畿内人形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89 1978年 同「帆立貝形古墳の築造企画」『考古学研究』106 考古学研究会1980年など

⑩ 大和久寛平・塙静夫『栃木県の考古学』吉川弘文館、1972年

このなかで、基壇という言葉を大和久氏が初めて使用し「ここで指摘する基壇は段築のことではなく墳丘の裾にさらに低く緩やかな傾斜をもつ広い面を指している。」と述べている。名称は不適切かもしれないが、この地域の首長墓に集中して認められるこの構造の解明は、これらの古墳の正確な位置づけ評価に不可欠である。

⑪ 秋元陽光・大橋泰夫「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向」『栃木県考古学公誌』第9集、1988年

この点について、秋元・大橋両氏は、思川・田川水系にみられる古墳は「基壇を持ち、主體部を前方部に設けるというきわめて特徴のある『下野型古墳』と呼べるような古墳の様式を採用」していると述べ、これらの首長周間のきわめて強い政治的な結びつき、あるいは一種の連合体制の存在の可能性を指摘している。また、基壇をもつ前方後円墳のなかにはほぼ同規模と捉えられる古墳や、基壇と墳丘長が等しくなる古墳があり、さらにつきの関係は帆立貝式古墳や円墳の間でも見られると述べ、「このようなことから、基壇を持つ古墳の築造は共通した築造企画のもとに行われたと考えることができる」と結論している。

⑫ 大和久寛平・塙静夫『栃木県の考古学』1972年

大和久氏は基壇の分類を行い、墳丘の裾からなだらかな斜面になっているもの、平坦で広いものとに分けて、前者を中期型、後者を後期型とした。しかし、なだらかな斜面になっている部分が本来の形状を示すものかどうかは発掘調査を行った例がないので判明できない。

⑬ 石部正志・川中英夫・堀田博一・宮川徳「畿内大形前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89 1978年などによれば、後円部の各段が同心円であるのは稀であり、一般的には非同心円で企画されるようである。

⑭ 国分寺愛宕塚古墳の石室は、愛宕神社の改築工事の際に凝灰岩製の側壁が露出したことがあり、その位置がほぼ確定できる。

⑮ 国分寺愛宕塚古墳の立面の企画については、周囲が現地表から約1.5mの深さになると仮定したとき、周囲底から墳頂までの高さが6.5mとなり、1区6.56mで企画した可能性が出てくる。

⑯ 石室の側張りの企画性については明らかではないが、石室の中央（奥壁、玄門からそれぞれ2尋の位置の基準線上）から、東西に5尋（1区）ふった位置を中心円弧を描くと、側壁根石ラインとはほぼ一致する。

⑰ 小森紀男・黒田理史「国分寺町山上塚古墳第3次発掘調査報告」『栃木県しもつけ風土記の丘資料館年報』第4号、1990年

研究紀要 第1号

発 行 平成4年3月31日

編集・発行 財団法人 栃木県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

〒329-04
栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙 474
TEL 0285-44-8441
FAX 0285-44-8445

印 刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
